

ニド・デ・アギラス
…鷺のねぐら

立処 真

青山ライフ出版

ニド・デ・アギラス

・
・
・
鶯わしのねぐら

立処 真

目次

序章	大スターのねぐら	3
第一章	夢売り人	びと
第二章	ガラスの人形	
第三章	追い討ち	
第四章	巣立ちのとき	
第五章	転生	てんせい
終章		

1 8 7 1 4 4 1 0 6 6 7 21 3

序
章

大
ス
タ
ー
の
ね
ぐ
ら

「それでは、見事榮えある主演女優賞最優秀賞に輝いた我らの夏目玲奈さんに、早速、受賞のお喜びを語っていただきましょう。

おめでとうございます、玲奈さん。さあ、こちらにどうぞ。テレビの前に釘付けの全国の皆さんに、不世出のメガスターの艶やかな晴れ姿をご披露ください」

二〇〇六年三月五日に芝高輪の五つ星ホテルで開かれた、日本で最も権威があるとされる日本アカデミー賞の第三十三回授賞式。はらはら、どきどき感と歓喜の大波の交差で興奮の堵塞性と化したその会場と番組スタジオを結んで、民放テレビ局が式の一部始終を、ゴールデン・タイム枠で独占生中継している。

なん本もの色鮮やかなスポットライトを四方から浴びて、立体的に浮かび上がる晴れがましい舞台。その中央では、厭味のない絶妙な司会で今や売れっ子として引っ張りだこのお笑いタレントが、得意即妙な口上で玲奈を壇上に誘っている。

「ありがとうございます。あと私、とてもびっくりして、まだまだ夢心地です。頬をつね

一

司会者にエスコートされてためらいがちに壇上に上がった長身、細身の玲奈が、会場のどよめきが収まるのを待つて大きく深呼吸し、胸の動悸を抑えるよう手を当てておずおずと話し始めた。持ち前の人的心をくすぐるようなハスキーナ声が会場に流れると、再び拍手と歓声の大渦が巻き起こり、暫くは止みそうにない。

「非の打ちどころのない美しい曲線を楽しませてくれる、淡いバイオレットのイブニング・ドレスが、眩しいくらいよく似合っています。いつ見ても惚れ惚れとさせられますネ。女性の私でも見とれてしまう究極の造形美だわ。玲奈さん、おめでとう・・・・・」

番組スタジオのコメンテーター席に陣取る、辛口で気分屋としても知られる女流映画評論家が、ここぞとべた褒めする。さきほどの主演男優賞のときの酷評でとげとげしくなったスタジオ内の雰囲気が、打つて変わつて一気に和やかさを取り戻した。

「まだ二十二歳なんですってねえ。でも気品があつて大人びたその物腰からは、成熟した女性が醸し出すしつとりとした艶やかさが漂つてきますよ。彼女だけの独特的華なのネ。そう、今回の彼女の受賞はまったく大方の予想通りで、議論の余地はなかつたです。なんといつても玲奈さんの評価は群を抜いていますから」

「こんな身に余る出番を頂戴して、私は何をどう申し上げればよいのか・・・・・。すつかり頭が混乱してしまつて。監督、早く台本をいただかないと、いつまでもこんなにうろたえた格好で壇上に立ちすくんだままに・・・・・」

*

巧たくまずして出た玲奈のジョークに、会場がどつと沸き返った。

「セリフを与えられていないと、こんなにも話し下手なのかと、みなさんにあきれられるのを覚悟で・・・」

そうですね、女優として未熟で不器用な私が、といふか、日本人としてもまだ半人前で、見習い中のような私がこの賞をいただけるなんて、この瞬間もまだ信じられないのですが・・・、でも現実だとすると、まず思い浮かぶのは、それはなんと言つても監督を初めとして、私を導き支えてくださった多くの方々のお陰に他ならないということです。

この場ではお一人お一人のお名前を挙げるわけにはいきませんが、そういうみなさんに有りつたけの感謝の気持ちを、心をこめて送らせていただきます。この賞は、そういう方々すべてを代表して私がいただいたものと考えます」

*

「一昨年の日本映画大賞女優主演賞、昨年のブルーリボン賞主演女優賞、そして今回と、主要な賞をあれよあれよという間に総なめにした彼女は、私が言うまでもなく、今や日本映画界を代表する押しも押されもない看板スターです。日本が世界に誇る・・・。

そう、彼女は日系二世であることにしてとても謙遜していますが、映画一筋に賭ける彼女の意気込みと生き様からは、日本の映画界を背負っているという並々ならぬ自覚と情熱が伝わってきます。浮いた噂の一つもなく・・・」

女流映画評論家の滑らかな解説が、さらに続いた。どういう風の吹き回しか、斜に構え

たような発言を自分のトレードマークにしている彼女にはおよそ似つかわしくない、律儀でまともな論調が目立っている。

*

「それとやはり、とてつもない幸運の女神が私に微笑んだからこそその受賞に違いない」と思うんです。早くもこの歳で、二度とないようなそういう幸運を使い果たして、なんだかこれから先が思いやられますが・・・。

ですから嬉しさ半分、そして手放しでは喜べない怖さ半分です」

あまりへりくだり過ぎると嫌味に聞こえることがあるが、玲奈がそう言うと素直に受け取られて、好感をもたれるから不思議だ。

「それにしても、彼女の個性的な美貌は、ずば抜けています。どこか愁いを帯びた大粒の黒い瞳、肉感的な唇。小顔なのに全体的に彫りが深くて、ちょっと日本人離れした感じですネ・・・・。

美人の誉れ高い歴代の名女優の中でも際立っていて、その才能と相まって、間違いなく五十年に一人というような逸材ですよ。ほら、あんなにきらきらと輝いていて・・・」「同感です。それに、ファインダーの向こうの圧倒的な存在感とでも言うのかな、他の追随を許しませんよ。彼女が現れると、目が吸い寄せられる」

独特的の節回しの語り口と涙もろさでお馴染みの芸能レポーターが、スタジオ内の隣席か

らすかさずツボを押された相槌を打つと、我が意を得たりという表情を顔に浮かべて、満足そうに女流評論家が頷いた。

*

「でも今はこれ以上難しく考えずに、素直にファンのみなさんと喜びを分かち合うべきですネ。感謝感激です。本当に私は幸せ者です。」

どうかみなさん、不^ふ束^{つか}な人間ですがこれからも女優夏目玲奈を、飽きずにごひいきください。よろしくお願ひします」

そう言い終わつて優雅にお辞儀をした玲奈に、再び会場を埋め尽くすスタンディング・オベーションが万雷の拍手を伴つて捧げられた。

*

「今回の受賞作は、全く無名の作家の異色の大河小説が原作で、それが偶然監督の目に留まつて、そのヒロインのイメージが彼女にぴったりだつたことから、あえて映画化されたそうですが・・・。」

先の大戦、そして戦後を経て日本が繁栄への道を模索する中で、流れ星のように時代を彩^{いろど}つた一人の悲運な女性。その健気な真心と涙を表現した玲奈さんの迫真的演技からは、ときに直視できないほどの強いショックを受けた人が多かつたのではないか?私はなん回も鳥肌が立つた覚えが・・・。細かい一つ一つの仕草や所作からもジョンと心の動きが伝わつてくるのだけれど、そう、彼女の眼なのネ、異彩を放つのは。大写し

になつた彼女の眼を見ていて、思わず引き込まれそうになるの。そしていつしか自分が彼女と一体になつて、スクリーンからこちらを見ているような錯覚に陥つて、あわてて……。

今ではテレビに奪われた、昔日の映画黄金時代の隆盛。彼女がその救世主になり得るのか？ 大いに期待したいものです。いいえ、もう十分に彼女は期待に応えてくれています。古き良き時代の再来は、もう目と鼻の先ですよ。映画万歳、玲奈万歳・・・・・

（映画こそわが人生）という自らの熱い思いがつい込み上げてきたのだろう、感極まつたような女流評論家の上つ調子な万歳コールに、スタジオ内が一瞬静まり返つた。

もしかしたら日頃の彼女の斜に構えた発言も、折々の酷評も、愛する映画産業のさらなる没落への危機感の強い表れで、玲奈のような久しぶりの大器への常軌を逸した入れ込みようは、その反動なのかも知れない。

*

いつまでも鳴り止みそうにない、耳を聾するばかりの拍手に送られて自分の席に戻った玲奈の脳裏を、初めて南米チリから日本にやつてきた十八歳のときの、不安と孤独感から強度のホームシックに悩まされた苦い記憶が、フラツシュバツクのように過ぎつた。（あのときはまさかこんな晴れがましい日が来るとは想像さえもできずに、両親の祖国日本でなんとか自立する道はないかと、ただそれだけを考えてその日その日を暮らしていたんだわ。

自分にどんな才能があつて、将来の夢はなんで、今何をしてみたいのかなど、まるで分